

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

——南亮三郎先生に捧ぐ——

別 府 芳 雄

まえがき

エンゲルスは彼の晩年の著作『家族・私有財産および国家の起源』(Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats. 1884) (マルクス死の翌年) の初版の序文において、唯物史観の「新しい定式化」をこころみている。「唯物論的な見解によれば、歴史における究極の決定的要因は直接的生命の生産と再生産とである。しかしこれは、それ自体さらに2とおりにわけられる。一方では、生活資料の生産すなわち衣・食・住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方では人間そのものの生産、すなわち種の繁殖 (andererseits die Erzeugung von Menschen selbst, die Fortpflanzung der Gattung) がこれである。ある特定の歴史的時代および特定の国土の人間の生活がいとなまれる社会的諸制度は2種類の生産によって、すなわち一方では労働の、他方では家族の発展段階によって制約される」と。(傍点原著者、○印引用者)、このエンゲルスの定式化は1859年にマルクスによって『経済学批判』の「序言」に示された——余りにも、そして余りにも有名な唯物史観の定式とは違う。マルクスのばあいには「人間は、彼らの生活の社会的生産において (in der gesellschaftlichen Produktion ihres Lebens)、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力 (materielle Produktivkräfte) にはいる」ことになっているが、このマルクスの定式には、エンゲルスのいう「他方では人間そのものの生産、すなわち種

の繁殖 (andererseits die Erzeugung von Menschen selbst, die Fortpflanzung der Gattung) という内容が欠如していることが明らかである。いうまでもなく、このばあいにおけるマルクスの唯物史観の定式とは、彼が1844年の『経済学・哲学手稿』以来——15年のながい研究プロセスのなかで導びき出され、1859年に結実したところの一般的結論——ではあるが、この定式には、〈種の繁殖〉(=人口増殖)という内容が盛り込まれていない。つまり晩年のエンゲルスの“新らしい定式”とマルクスの『経済学批判』序言の古典的“定式”とは内容的に相違する点がある。いいかえるとエンゲルスは晩年になってから——しかもマルクス死後——唯物史観の定式を勝手に拡張解釈（あるいは補足）したということにもなる。そこで、唯物史観における「生の生産の2重性」(Doppelcharacter der Produktion des Lebens)の意味をめぐって——晩年のエンゲルスのおこなった拡張解釈をめぐって——研究者間でさまざまな論議がうまれるのは当然のことであった。たとえば河上肇博士などは、往年の名著『唯物史観研究』(大正11年、第8版)において、エンゲルスの“新らしい定式化”を指して、ここでは「マルクスの史観の特徴であるところの、その一元的性質は、まったく破壊されてしまった」(・印引用者)とさえ述べている。いったい、唯物史観の定式をめぐって、マルクスとエンゲルスで、このような諸定式化の表現上の相違が、なぜ、どのようにして起ったのか——小論では、この問題を追究する。小論は、筆者が、昭和55年正月以来、毎月の人口学研究会において、つねづねご指導を賜っている恩師、南亮三郎先生から賜ったご下問に答えるため書き綴ったものである。筆者の生来の不勉強のため、先生の意に召されぬ点が少なからざるものがあるとうと憂いつつ理解しえた限りで報告してみたいと思う。

Ⅰ. エンゲルスの「新らしい定式化」の由来

——マルクスの遺言執行——

エンゲルスの新らしい定式化が、いつ、どのようにして書かれたものかを、先に述べておくことにしよう。

エンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源——ルイス・H・モルガンの研究によせて』（Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats …… In Anschluss an Lewis. H. Morgans' Forschungen. 1884）はエンゲルス 63 才の時の著作である。マルクスは前年つまり 1883 年 3 月 14 日、午後 2 時 45 分死去してしまった。ところで「モルガンの著書は、〔生前の〕マルクスに対して著るしい印象を与え、彼〔マルクス〕は、この著書から註解（Anmerkung）や説明（Erläuterung）や批評（Kritik）を付加した長い抜萃（lange Auszüge）を作って、モルガンの研究の結果を、自己の結果と連関せしめて、特別な著書として述べようとしたほどである。晩年におけるマルクスの病気の亢進（Die zunehmende Kränklichkeit）はこの計画の実行を妨げて¹⁾しまった。そこでマルクスの死後、エンゲルスが、マルクスの残した草案（Entwurf）を使って、モルガンの研究を唯物史観の立場から叙述したものが『家族・私有財産および国家の起源』である。順を追って説明すると、エンゲルスは「マルクスの没後、これまで以上にはげしく国際労働運動の助言者（Ratgeber）として活動し、また多数の論文と単行本のなかで弁証法的小説および史的唯物論を新しい知識の分野に適用しているその時期に、同時に、その友の残した『資本論』の草稿を仕上げる仕事に努力をかたむけた。マルクスは、その死の直前に、娘エレアーノル（Eleanor）〔エリナ〕にむかって、エンゲルスが未完成のままの草稿を「役立つものにしてくれる」だ

ろう (Engels möge aus dem unvollendet gebliebenen Manuskripten “etwas machen”)²⁾と言った」という。そこでエンゲルスが亡友マルクスの〈未完のままの草稿〉を整理していたとき、たまたま、「エンゲルスは、マルクスの遺稿 (Nachlass) のなかに、アメリカの民族学者ルイス・ヘンリ・モルガンの著書『古代社会、または野蛮から未開を経て文明にいたる人類の進歩の径路の研究』(“Die Urgesellschaft oder Forschungen über die Entwicklung der Menschheit von der Wildheit über die Barbarei bis zur Zivilisation”) から広範な抜き書き (umfangreiche Auszüge) を発見した。〈モルガンは、彼の対象が提供する限界内で、独立にマルクスの唯物史観 (die Marxsche materialistische Geschichtsanschauung) を新発見した〉というのが、エンゲルスの第1印象であった。1884年3月末、エンゲルスは——〈僕はもともとマルクスにたいして、そうする責任がある〉 (ich bin eigentlich Marx schuldig) ので——モルガンの著書にたいするマルクスの批判的注釈 (kritische Anmerkungen) を使って、史的唯物論の立場から同書の研究成果を分析し、概括すること³⁾になったもので、その成果が1884年5月末の『家族・私有財産および国家の起源』となって結実したものなのである。しかし、これを「合法誌『イノエ・ツァイト』 (Die Neue Zeit) に掲載することができないことが、エンゲルスには確実であった。そこで、この労作は、チューリッヒで印刷され、一部は合法的に、一部は非合法 (teils legal, teils illegal) で、ドイツに広められた⁴⁾ものであった。つまりエンゲルスがマルクスのノート、「古代社会・摘要」(『全集』補巻4に収録) を発見したのが1884年2月であった。このマルクスの「古代社会・摘要」は大型ノート98ページにわたって書き込まれていた。だからエンゲルスとしては、マルクスの、古代社会研究の遺志をついで——1884年10月『家族・私有財産および国家の起源』と題して、スイスのチューリッヒで、序文4頁、本文146頁、初版5千部を印刷、「一部合法で、一部非合法」で公刊したものである。だからエンゲル

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

スは1884年の初版への序文のなかで「以下の諸章は、ある程度まで遺言の執行（die Vollführung eines Vermächtnisses）をなすもの⁵⁾」といい、「マルクスその人がモルガンの研究の諸成果を……唯物論的な歴史研究の結果とむすびつけて叙述し、それによって、はじめて、その全意義をあきらかにすることを自分の仕事として予定していた⁶⁾」のに、マルクスが死亡してしまったので、エンゲルスは『家族・私有財産および国家の起源』を「私の亡友に、もはやなしとげることがゆるされなかった（zu tun nicht mehr vergönnt war）仕事のまずしい代用物を（einen geringen Ersatz）⁷⁾」与えうるにすぎないと断って書いた著作である。これでわかる通り、エンゲルスはマルクスの死後なお12年間も生きのびたから、マルクスの遺言執行のつもりで『家族・私有財産および国家の起源——ルイス・H・モルガンの研究によせて』を執筆したものなのだが、ただ当時のエンゲルスのおかれていた状況についていえば「……理論的作業では、これまでのところ、僕やマルクスの代わりを勤めてくれる者が、まだ見当らない。若干の連中がこれまで理論的作業でやろうとしてきたことは、ほとんど価値がなく、多くの場合、やらないほうがましなくらい（meist sogar weniger als nichts wert）だった。カウツキーだけが熱心に研究してはいる（Kautsky, der einzige, der fleissig studiert）が、暮しのために書かなければならず、そのためなにも成果をあげることができないだろう。そこでいまや63才にもなる僕が自分自身の仕事を、肩いっぱいに背負いこみ（mit dem Puckel voll eigener Arbeit）、これから1年目には『資本論』第2巻（Ⅱ．Band des “Kapital”）の仕事をかたづけ、2年目には、43年から63年までのドイツ社会主義運動史と67～72年の国際史のほかに、マルクスの伝記（Marx’ Biographie）を書くつもりでいる。その僕が当地の静かな宿を、集会や文筆闘争に参加しなければならず……以前にはマルクスと僕とのあいだで分けていたのに、1年以上まえから、それを僕ひとりでやらなければならないのだ。それというのも、

あらゆる国々からマルクスの書齋へ自発的に集ってきた多くの糸を、僕の力の及ぶかぎり、断ち切らないでおこうと思うからだ⁸⁾』というベーベルあての手紙からわかるように、マルクス死後、エンゲルスの肩にかかってきた負担は並々ならぬものであったに違いない。じじつエンゲルスは「マルクスの没後まもなく、比較的長いあいだ病臥」してしまったくらい、並々ならぬ労苦がエンゲルスの双肩にかかってきていた。さし当ってエンゲルスの第1の任務は「他人には、ほとんど読めないマルクスの筆蹟を判読し、それを読める草稿 (ein lesbares Manuskript) に引きなおすこと⁹⁾」から始めねばならず、エンゲルスがベッカー (Johann Philipp Becker) あてに書いたように「まず『資本論』の第2巻 (II. Band des "Kapital") をだす必要があり、これはふざけ仕事ではない (Kein Spass) 第2部のうち、あるのは4ないし5論稿で、そのうち最初のものしか完結しておらず、その後のものは、たんに始めがあるだけ¹⁰⁾』という仕末だった。だからエンゲルスは旧友ラヴローフ (Lawrow) あてに「ああ——この第2巻！旧友よ、あなたは私がどんなにそれを苦にしているか、ご存知だ！ (Ach! ... dieser 2 Band! ... wie mich der bedrückt!) と悲鳴をあげざるをえなかったくらいだった。結局、エンゲルスは1885年に『資本論』第2巻の仕事を終えることになるのだが——〈遺言執行〉の最初の労作は、エンゲルスが悲鳴をあげた『資本論』の第2巻ではなく、エンゲルス自身の著作として『家族・私有財産および国家の起源』(1884)が、マルクスの遺言執行としての最初の著作であった。そして、この〈遺言の執行〉(die Vollführung eines Vermächtnisses) としての『家族・私有財産および国家の起源』の序文につけた唯物史観の新しい定式化が研究者間に紛争をまきおこすことになる。というのはエンゲルスが小論の〈まえがき〉で述べたような唯物史観の「新しい定式化」——をこころみたからであるが、その——新しい定式化は、かつて1859年に亡友マルクスが『経済学批判』の序言で示した古典的な定式化と違う点がある。エンゲルス

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

のばあいには「〈歴史における究極の決定的要素〉を〈直接的な生（レーベン）の生産および再生産〉（die Produktion und Reproduktion des unmittelbaren Lebens）と規定し、しかも、この生産は2種類に分かれるものとして、一面では〈生活資料の生産〉（およびそれに必要な諸道具の生産をふくめて）、他面では〈人間それ自身の生産、すなわち種族の繁殖〉をあげている。してみると、唯物史観は単に物質的生活資料の生産および再生産を歴史の根底に見るのではなく、人間それ自身の生産——人口の増殖——をもまた歴史の決定力と見ているように思われる」（新カナ使いに改む。以下同じ）からである。このエンゲルスの「新らしい定式化」をめぐって、さまざまな批判が生まれることになっていく。そこでまずエンゲルスの「生の生産および再生産」＝「生の生産の2重的性格」（Doppelcharacter der Produktion des Lebens）をめぐり、さまざまな批判から述べてみることにしよう。

- 注 1) H. Cunow. Die Marxsche Geschichts-Gesellschafts und Staatstheorie, Berlin, 1923. II. Band. S.86. クノウ「歴史・社会・国家学説」（『社会思想全集』（第22巻）河野密邦訳、平凡社、昭和3年455頁所収）。印引用者。
- 2) F. Engels, Eine Biographie, Dietz Verlag Berlin, 1970. S.503. ゲムコフ編『フリードリヒ・エンゲルス伝記』（下）1976年、大月書店、160頁。
- 3) ibid., S.520. 邦訳、同上、173頁、○印引用者。
- 4) ibid., S.521. 邦訳、同上173～4頁。
- 5) M. E. A. S. S.159. 『マル・エン2巻選集』129頁、○印引用者。
- 6) ibid., S.159. 同書129頁、○印引用者。
- 7) ibid., S.159. 同書129頁、○印引用者。
- 8) Engels an August Bebel (30. April. 83), M.E.W. Bd. 36. S.21～22. 「1883年4月30日付ベーベルあて」の手紙（『全集』36巻、18頁所収）。印引用者。
- 9) Eine Biographie, op. cit., S.504. 邦訳161頁、○印引用者。
- 10) ibid., S.504. 邦訳161頁、○印引用者。
- 11) ibid., S.504. 邦訳161頁。

- 12) 南亮三郎『人口理論と人口問題』千倉書房、昭和10年、54頁、○印引用者。

Ⅱ. エンゲルスの拡張解釈をめぐる、さまざまな批判

(1) まず、河上肇博士による批判を、博士の往年の名著『唯物史観研究』(昭和11年、第8版)から——やや長文であるが——引用して述べることにしよう。博士はいう「…エンゲルスの主として晩年における解釈は以上述べたところよりも、さらに一步をすすめて甚しく生産なるものの意義を拡張している。すなわち彼が1890年にしたためたる書簡のうちには、次のごとき文句がある……〔ドイツ語文省略す〕、『唯物史観にしたがえば、歴史における究極の規定的要因は現実の生命の生産と再生産とである。それ以上のことは、マルクスも私もかつて主張したことがない』なお、さかのばれば、これより6年前、1884年に『家族・私有財産・国家の起源』を公にしたる時にも、その序文の一節に、彼〔エンゲルス〕は、やはり次のごとく述べている……〔ドイツ語文省略す〕、『唯物史観にしたがえば、歴史における最後の決定的要素は、直接的生命(生命そのもの)の生産および再生産である。しかるに、このものは、おのずからさらに分れて2種となる。その1は生活資料の産出、すなわち食物、衣服、住居の産出ならびにこれに必要な道具の産出である。その2は人間の産出、すなわち種の繁殖である。一定の歴史的時期および一定の国土の人間がそのもとに生活するところの社会的制度は、生産の2種類により、すなわち一方においては労働の発展段階により、他方においては家族のそれにより制約せられるものである』右の一文によりてみれば、エンゲルスが〔現〕実的生命または直接的生命の生産といっているのは、人間の生命を維持することであり、また、これが再生産といっているのは、人間の生命の再生産、すなわち、子孫の生殖のことを指すのである。されば歴史を左右する根本条件なるものは、もとのままに〈生産〉なる文字にまとめられており、外

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

見においては依然一元論たるの体裁をそなえているけれども、その生産といえるものは、じつは物質的生活資料の生産というよりも、はるかに広義なものに化しており、マルクス史観の特徴であるところの、その一元的性質は、まったく破壊されおわれるわけである。以上、述ぶるところによってみれば、マルクスのいわゆる生産の意義は、彼自身すでになんらかの説明をくだしていないので、ほんらい曖昧（あいまい）なるをまぬかれざるがうえに、ことに彼「マルクス」の意見を祖述せしエンゲルスの説明を参照するときは、ますます茫漠（ぼうばく）たる意義を有するにすぎざるがごとく見ゆるのである。ここにおいてか、マルクスのいわゆる〈生産〉の意義、果して如何、ということが、彼の史観を理解するがために、もっとも重要な問題となりきたるのである¹⁾」（新カナ使いに改む。以下同じ）のみならず「マルクスが歴史の一元的動力となせる生産力なるものに、果してエンゲルスのいえるごとく、人間の生命の再生産すなわち子孫の生殖のことを包含するや否や、これが生産の意義にかんする最後の疑問である。……彼「マルクス」が歴史の一元的動力となしたものは、明らかに物質的の生産物である。『経済学批判』の序「言」にも明らかに「人間は……彼らの物質的生産力の一定の発展段階に適應するところの生産関係に入りこむものである」といっている。そうして、このいわゆる物質的生産のうちに、人間そのものの生産（すなわち人口の繁殖）を包含せざるは、ほとんど疑いなきことである。『資本論』（Band III. Theil 2. S.420.）をみるときは、前にも引用したように、〈人間が彼らの人間的生命の再生産において、たがいに入りこむところの関係〉というような文字があつて、その外形はいかにもエンゲルスが現実的生命（または直接的生命）の再生産といっているのに酷似しているけれども、しかもマルクスの意味は、人間の生活に必要な貨物の生産を指すにすぎないので、エンゲルスの意味せるように子孫の繁殖を指すのではないことは、前後の関係をみて、きわめて明らかであろう」（複生産（Reproduktion）を再生産と改め、用語を統一しておく）

つまり唯物史観における〈生の生産および再生産〉を〈歴史の究極の決定的要因〉と規定するばあい、〈生の生産および再生産〉という言葉のなかには——エンゲルスが意味しているような〈種族の増殖＝人口増加〉という意味が入っていないのだ、といい、エンゲルスが拡張解釈したものであるという。

(2) 大森義太郎氏は、エンゲルスの“新しい定式化”は「史的唯物論の定式化ということから、むしろ離れているもの」であって「ほんらいの史的唯物論の主張と相反するかのごとく見える」と述べ、次のごとくいう「ここでエンゲルスは『歴史における窮極の決定的要素として、固有の生産すなわち『生産資料……ならびに、それに必要な諸道具の生産』のほか『人間それ自身の生産、すなわち種族の繁殖』を挙（あ）げている。これもまた、ほんらいの史的唯物論の主張と相反するかのごとく見える³⁾」という。つまりエンゲルスが「歴史における究極の決定的要素」として、生産資料ならびに、それに必要な諸道具の生産のほかに〈人間それ自身の生産すなわち種族の繁殖〉を補足していることが、ほんらいの史的唯物論の主張と違うように思われるという。

(3) ハインリヒ・クノー (Heinrich Cunow) は『マルクスの歴史・社会ならびに国家理論』 (Die Marxische Geschichts-Gesellschafts-und Staatstheorie Bd II) (1923) において、まずエンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』 (1884) の初版の序文にみられる“新しい定式化”を掲げたのち——以下のように批判している。「エンゲルスがここでなしている〈生活手段の生産〉 (Erzeugung von Lebensmitteln) と〈人間生産〉 (Erzeugung von Menschen) との同視 (Gleichsetzung) は、単に表現類似 (Aehnlichkeit des Ausdrucks) に基いている。いずれの表現にも“生産”という言葉 (das Wort “Erzeugung”) が存するという事実に基づいている。しかしながら、その他の点では有用品の生産 (die Erzeugung von Gebrauchsgegenständen) は人間の生産と何の関係もない。消費品の製出

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

行為（der Akt der Herstellung von Konsumartikeln）は生殖行為（Zeugungsakt）および出産行為（Geburtsakt）と何の関係もない。生産手段生産の発展に対応する人間生産の発展は存しない。人類発展の間に、生産道程（Produktionsprozess）およびそれに用いられる生産手段ならびにそれから生ずる生産物（Produkte）は常に変化し、全行程（der ganze Vorgang）は、一定の社会的に条件づけられた法則（bestimmten gesellschaftlich bedingten Gesetzen）にしたがっておこなわれるに反して、人間の生産——性的行為（Geschlechtsakt）、受胎（Empfängnis）、胎児の発育（Föetalbildung）等は——つねに同じ方法で、同じ自然法則にしたがって、同じ手段をもってなされる。しからば如何なる範囲において生殖もしくは出産行為は変化したか？（Inwiefern hat sich denn der Akt der Zeugung oder Geburt geändert?）。発展の間に変化したのは、この行為自身でなくて、それがおこなわれた、そして、こんにちなお、おこなわれつつある環境（die Umstände）である。しかも社会的環境（die gesellschaftlichen Umstände）、すなわち結婚締結の方法、同棲生活の方法、配偶者の相互および子供に対する地位の態様、出産の際に一般におこなわれる慣習の態様などである。——この環境は終始かわらない自然の法則によって決定せられるのではなく、歴史的に与えられた社会組織（die geschichtlich gegebene Gesellschaftsverfassung）によって決定され、この社会組織はまた経済的発展の状態に依存（abhängen）するのである。生殖および出産行為の際に遵守される慣習が社会生活を決定するのでなく、反対に、社会生活（Gesellschaftsleben）からその慣習（die Gebräuche）が生ずるのである。如何にしてエンゲルスが〈人間の生産〉を独立な発展の要素として、経済の発展と同様に扱ったか、ほとんど理解することができないほど、これは明白である。少なくともマルクスの唯物史観を理解しているものにとっては明白である。……これによってエンゲルスは唯物史観の統一性を全然破壊した（Damit durchbricht aber Engels völlig die

Einheitlichkeit der materialistischen Geschichtsauffassung)。何となれば、正確にみて、この性交を経済方法と同視することは、社会生活の一部のみ (nur ein Teil des sozialen Lebens) が経済方法 (Wirtschaftsweise = 経済様式) によって決定され、他の部分は性的生活 (Geschlechtsleben) によって決定せられることを語るものであるから。如何なる部分において経済方法 (経済様式) が決定的の要素をなし、如何なる部分において人間の生産 (Menschenproduktion) が決定的の要素をなすか。すなわち、この2つの要素は如何なる特殊の作用の範囲 (Auswirkungsphäre) を有するか？ あるいは社会発展の各観察者に、その人の勝手に、もしくは単なる外見によって、あるいはこの要素を、あるいは他の要素を、唯一の、もしくは主なる決定的のものとみることが委せられているであろうか？ これは純粹の任意であろう。がもし、その特殊な作用の範囲 (Wirkungskreis) があるとすれば、この範囲は相互に如何に境界 (grenzen) されているのであるか——換言すれば、2つの要素は如何に制限 (beschränken) されているのか——また如何なる範囲まで、それは互に影響し合うのか、多かれ少なかれ互にマヒ (lähmen) し合い、もしくは補足 (ergänzen) しあうのであるか？ もし唯物史観が歴史の因果説としての意義 (Bedeutung als einer historischen Kausaltheorie) を忘れず、すべての歴史の実験者の適当なる手なぐさみ (gefügiger Spielball = いいなりになること) となるためには、これは是非とも答えられなければならない問題である。エンゲルスはかかる質問を全然発しなかった。いわんや、それに答えようとはころみななかった。彼は単純に、いわゆる〈人間の生産〉を、それから生ずる結果を考慮せずして、新らしい〈決定的要素〉 (neues “bestimmendes Moment”) として経済方法 (Wirtschaftsweise = 経済様式) に付加することをもって満足している⁴⁾のだ、と批判している。(新カナ使いに改む。当用漢字以外は平カナに改む。以下同じ)。つまり、エンゲルスの〈生の生産および再生産〉にかんする拡張解釈 (= 種族の繁殖を勝手に加えたこ

と）を激しく非難し、エンゲルスは、かくのごとく、唯物史観の統一性を完全に破壊したという。

（4） ツガン・バラノヴスキイ（Tugan-Baranowsky）はいう「食欲とならんで、人類種族の保存上、これに劣らず必要不可欠な他の一衝動がある。それはすなわち性的衝動である。じつに食欲と性欲とはシルラーの有名な言葉を借りていえば、自然が〈機構を維持する〉ところの2大動力たるものであって、これらの衝動はいずれも人類の動物的性質に深く根ざしている。そこで人類史の自然科学的確立を目的とする唯物史観論者はまた、食欲とならんで、この性的衝動をも決定的社会力と見做すようになった。唯物史観説のかかる転向は、エンゲルスの『家族・私有〔財産〕および国家の起源』の中に与えられた。これによって、ほんらい厳密に一元的であった唯物史観説の立場は廃除されることになったのである。かかる転向への誘惑者たる役割を演じたものは、アメリカの社会学者ルイス・モルガンであった。彼れはその著『古代社会』のなかで、全世界に通用しうる家族発達史を組みたてようとした⁵⁾のだ。かような「架空の構想〔モルガン〕によって、マルクスやエンゲルスが、その歴史哲学的体系の根本思想をほうてき（原文漢字）すべく誘惑されたということは、まことに不思議な現象⁶⁾」といわねばならない。エンゲルスが『家族・私有財産および国家の起源』の序文のなかで——「ある特定の歴史的時代およびある特定の国土の人間の生活がいとなまれる社会的諸制度は、2種類の生産によって、すなわち、一方では労働の、他方では家族の発展段階によって制約される。労働がまだ未発達であればあるほど、またその生産物の量が、したがってまた社会の富がとぼしければとぼしいほど、社会秩序はそれだけ圧倒的に血縁の紐帯（Geschlechtsband）に支配されるようにみえる」——というばあい、「これによると、社会生活を支配するものは、経済上の物的因子という単一の要素ではなく、相互独立した特殊の2要素であるということ⁷⁾」になってしまう——「要するに、家族の発達をもって経済上の条件

から独立した、それ自身としての系列と見做すべき何らの論據も存在しないのである。性欲、自己保存欲も、種の保存上同様に欠くべからざる動力となっていることはいうまでもない。けれども社会発達上の意義についていえば、両者の間には極めて著るしい差異がある。生活条件の改善を求むる衝動は、人類をして自然との不断の闘争に、ますます前進せしめるところの刺戟となるものであって、人類は一定の経済的発達段階に達すると、さらにそれ以上の段階に達しようと努力するものであるが、性的衝動は反対に保守的のものであって、忽ち飽和状態に達してしまう。経済上の部面における人類の進路は、ほとんど無限に持続するところの一直線を描くものであるが、性欲部面における運動は循環的である。原始種族の中には、文明国民のそれと、ほとんど選ぶところなき家族形態を示すものがある……性的衝動なる要素が、今日の文明社会をよび起した老なる社会的進歩のうゑに貢献せること如何に微弱であったか、また性欲をもって食欲と同格の社会的因子なりとすることが如何に虚妄であるかはこれによっても知られるであろう⁸⁾と述べて、歴史における究極の決定的要因が〈生の生産および再生産〉であるというとき——〈生の生産および再生産〉の内容として、“種族の繁殖” = “人口増殖”を加え——生活資料の生産とならんで繁殖力（性欲）をも歴史の決定的動力としたエンゲルスの見解は、ほんらい厳密に一元的であるべき唯物史観を破棄したものであるという。

(5) 人口学者からの批判、歴史における究極の決定的要因が直接的生命の生産と再生産であって、しかも〈直接的生命の生産と再生産〉が〈人間そのものの生産すなわち種の繁殖 = 人口増加〉をふくむものとする、これは当然、人口学の問題にもなる。だから人口学者がエンゲルスの拡張解釈（＝唯物史観にたいするエンゲルスの2元論的定式化）を問題とするのは、当然のことであろう。南亮三郎先生は——あらかじめ——「私にとっての問題はたんに、エンゲルスの表現がマルクスの史観の統一性を破るものであるかどうかを、み究めることにあるのではない。むしろ積極的に、

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

いま私の眼前に立ちふさがっている〈人口〉という怪物がマルクスの史観とどう結びつきうるか、進みては、人間歴史において人口と経済とは、どういう役割を演ずるかが私の終局の問題」——と断わりつつも以下のように述べておられる。すなわち「エンゲルスは〈歴史における究極の決定的要素〉を〈直接的な生（レーベン）の生産および再生産〉（die Produktion und Reproduktion des unmittelbaren Lebens）と規定し、しかもこの生産は2種類に分かれるものとして、一面では〈生活資料の生産〉（およびそれに必要な諸道具の生産をふくめて）、他面では〈人間それ自身の生産、すなわち⁹⁾種族の繁殖〉をあげている。してみると、唯物史観は単に物質的生活資料の生産および再生産を歴史の根底に見るのではなく、人間それ自身の生産——人口の増殖をもまた歴史の決定力と見ているように思われる。それは一元論に立つといわれる唯物史観の統一性を破りはしないか、エンゲルスはマルクスの死後、厳密なるべき史観の構造に恣意をくわえてマルクスの本来の見解から離れ去ったのではなかろうか——それが、右の一文から湧いてくる疑問⁹⁾」（新カナ使いに改む。以下同じ）であるといわれ、さらに「それゆえに、もしエンゲルスが……唯物史観を祖述して〈歴史における究極の決定的要素は、直接的な生の生産、および再生産である〉こと、そして、この生産は2重の側面をもち〈一面では生活資料すなわち食・衣・住の諸対象、ならびに、それに必要な諸道具の生産、他面では、人間それ自身の生産、すなわち⁹⁾種族の繁殖である〉ことを説き出でたとすれば、彼はいちちるしくマルクスの見解から離れたもの、あるいはマルクス説に不当な〈拡張解釈〉を加えたもの、との非難を受けるにいたるのも一応は不合理ではないであろう¹⁰⁾」が「だがしかし、歴史と哲学とにかけでは、とくに造詣の深かったエンゲルス、40年にわたる長いかつ最も親しい交友と実り多き共労生活とを通じて誰よりもよく、マルクスの思想を体得していたはずのエンゲルス——そのエンゲルスが、たとえ生涯の盟友を喪（うし）なった後の、彼れ自身の晩年のことであつたとはい

え、マルクスの全然想い浮かべざりし新事項を勝手に補足して、しかもそれが〈マルクスと私との従来、提唱してきた唯物史観である〉などと公言するにいたったとは考えられない¹¹⁾と述べておられる。確かに、南先生のいわれるとおり「ことは彼らの、全科学的認識をつらぬく最重要なる歴史観の基礎構造にかんしている」問題である。両者のあいだで見解の^〇く^〇い^〇違^〇い^〇があ^〇っ^〇て^〇は^〇な^〇ら^〇な^〇い^〇問^〇題^〇である。とすればエンゲルスが唯物史観について、マルクスの定式と相違した「新しい定式化」(＝2元論的拡張解釈)を、あえてしたことの〈何か、深い理由〉を探がさなければならない。よって次節以下において、唯物史観の諸定式化をめぐる問題と〈生の生産および再生産〉を歴史の「究極の」(in letzter Instanz)決定要因としつつ、エンゲルスが2元論的拡張解釈を、あえてしたことの深い理由を探究してみよう。

- 注 1) 河上肇『唯物史観研究』大正11年、弘文堂書房、51～54頁、傍点原著者、〇印引用者。
- 2) 同書、60～61頁、傍点原著者、〇印引用者。
- 3) 大森義太郎『史的唯物論』昭和7年、共立社書店、218～9頁、〇印引用者。
- 4) Heinrich Cunow, op., cit., S.140～141. 邦訳515～516頁、傍点原著者、〇印引用者。
- 5) ツガン・バラノヴスキイ『唯物史観の改造』高畠素之訳、大正13年、新潮社、66頁、〇印引用者。
- 6) 同書、67頁、〇印引用者。
- 7) 同書、68頁、〇印引用者。
- 8) 同書、71～72頁。
- 9) 南亮三郎『人口理論と人口問題』千倉書房、昭和10年、54頁、〇印引用者。
- 10) 同書、60頁、〇印引用者。
- 11) 同書、64頁。

Ⅲ. 唯物史観と「生の生産および再生産」

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

唯物史観とその諸定式化、「生の生産および再生産」という概念について、ひとまず整理しておくことにしよう。

A. 定式にみられる概念の曖昧（あいまい）さ

唯物史観における「生の生産および再生産」を述べるに当たって、唯物史観の成立にかんするエンゲルスの次の説明を想起しておこう。エンゲルスはいう「ヘーゲルは歴史観（die Geschichtsauffassung）を形而上学から解放し、これを弁証法的なものとした——しかし彼〔ヘーゲル〕の歴史観は本質的に観念的なものであった。いまや観念論は、その最後の避難所（letzter Zufluchtsort）、すなわち歴史観から追いだされ、唯物史観（eine materialistische Geschichtsauffassung）がうちたてられて、これまでのように人間の存在を、その意識からではなく、人間の意識をその存在から説明する道が発見された」の¹⁾だ。しかもその発展法則として——「人間の歴史の発展法則」（das Entwicklungsgesetz der menschlichen Geschichte）というものは、きわめて簡単な事実で——「人間は政治や科学や芸術や宗教などをいとなむまえに、まず、食い、住み、着物をきなければならない。したがって直接的な物質的生活手段の生産（die Produktion der unmittelbaren Lebensmittel）」²⁾から出発するのだという。

ところで唯物史観について、述べておくべきことは、唯物史観とは、ひとつの歴史哲学であり、しかも「突如として生れ出たものでなくて……それ以前の科学の——ブルジョア科学の——発展の合理的なる継承として成立」³⁾したものであって、唯物史観は「社会の（存在の）一般法則を明らかにするものである。……社会において起る〈発展過程〉に対して、全体における連関に対して、ひとつの領域から他のものへの移行に対して、説明を与える」ものでなければならない。そして、かかるものとして史的唯物論は「歴史」哲学に属する⁴⁾ものである。しかも、その方法として「第1に、史的唯物論は社会を弁証法的に考察しなければならぬ。……弁証法的

考察の第1の根本的な条件は過渡的ということであるからして、史的唯物論は社会を一つの連続的な過程として見ることを要するであろう⁵⁾し、「第2に史的唯物論は唯物論的でなければならない。すなわち史的唯物論は社会をなんらかの精神的なものからではなく、物質的なものから説明しなくてはならぬ。社会の意証ではなくて、社会の存在が社会構造の、したがってまた社会変化の土台であるということが、史的唯物論の基礎観⁶⁾」をなすものである。櫛田民藏氏は「マルクス学の神髄は唯物史観であり、これなしには、マルクスの他のすべての学説は成立はしない。マルクス学は唯物史観とともに成立し、唯物史観とともに消滅する。それゆえに私はいう。マルクス学は唯物史観のみでないとするも、マルクス学は唯物史観一本であると⁷⁾」とさえいい切っている。だから「マルキシズムなるものは、すなわち唯物史観」とすると、唯物史観がマルキシズムの〈根底の根底〉(ブハーリン)であり、〈理論の理論〉(大森義太郎)であり、〈根本命題である〉(エンゲルス)といわれるのも無理からぬことであろう。一言でいえば「唯物史観とは唯物弁証法哲学の社会科学的方法論」といえよう。

それでは、唯物史観の定式(または公式ともいう)とは何か。定式とは、唯物史観が問題としているところの「われわれが棲息する国家社会の基礎は何であるか。それは如何にして変化するか⁸⁾」という問題に対する「解答」なのである。つまり、この問題についてマルクスが投げ出した「答案」がマルクスの〈定式〉であり、エンゲルスが投げ出した「答案」がエンゲルスの〈定式〉である。ただし、マルクスにしる、エンゲルスにしる唯物史観について、まとまった決定的な書物を書いて説明しているわけではなく——したがって、唯物史観の「定式」といっても「半世紀もかかってポツリポツリ書かれたいろいろな著書の中に散在している。だから大抵の場合、それは思い出したようにだしぬけに論ぜられている。時によると、さらにそれは省略されて単に言外にほのめかすか、しからざれば極

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

く包括的にしか言及されていないことがある。もしマルクスとエンゲルスとが与えた一切の概念を調和させようとするならば、矛盾した形式に突き当たってしまって、それがために慎重で厳密な解釈者が彼らの全体としての史的唯物論を纏（まと）めようとしても纏（まと）めようがなくなる。……次にもう一つの困難は、彼らの採用した言葉の内容を如何に解すべきかという点からくる……それが時によると彼ら自身の概念を曖昧ならしめたり誇張させたりするまでに至っている⁹⁾といった具合なのである。たとえば、マルクスが当時の問題に対して答えた「答案」が『経済学批判』（1859年）の序言の古典的な定式なのである。だからカウツキーは「吾々は知る。唯物史観はその批判家たちが普通に理解しているごとく、しかく単なる公式（einfache Schablone）ではない¹⁰⁾」と述べている。定式だけから唯物史観を理解しようとするのは危険である。マルクスにしるエンゲルスにしる、彼らが唯物史観について書いたものは「むしろ断片的であり、理論の核心を略説¹¹⁾したものにはすぎない。だから定式は唯物史観のミニ・モデル（Schablone）などと考えるべきものでなく——「定式」は、人間と社会の歴史を研究し理解するための「研究の一つの手引き」（eine Anleitung beim Studium）のようなもので、解明に役立つ「導びきの糸」（Leitfaden）なのである。「定式」は「定義」のことではない。「定義とは種々なる場合における、その概念の多様な内容のうちの共通なるものを集めたるもの¹²⁾」であるが、「定式化は一定の連関のもとに書かれ、一定の個所に力点がおかれ¹³⁾」ているのみならず、「諸定式化はその特に力説する点を異にしているが、しかしながら、それらを併（あわ）せ顧みるとき、われわれは史的唯物論の核心¹⁴⁾がどこに存するかを知りうる」ものなのである。一言でいうと定式化とは「断片的な警句的な註釈」（abgerissene aphoristische Bemerkungen）なのである。この点について、エンゲルスは唯物史観の誤った理解のしかたについて、1890年8月5日付のコンラード・シュミット（在ベルリン）あての手紙で「一般に〈唯物論的〉という

言葉を、ドイツの多くの若い作家たちは単なる常套語 (eine einfache Phrase) としてもちいており、それ以上の研究もしないで、なにもかにもに、この言葉のレッテル (Etikett) をはっている。つまり、このレッテルをはれば、それでことは済 (す) んだものと信じているのである。しかし、われわれの史観はなによりも、まず研究のさいの手引き (eine Anleitung beim Studium) であって、ヘーゲル派風 (à la Hegelian-ertum) の構成のてこ (Hebel) ではない¹⁵⁾と述べ、ブロッホあての書簡では、唯物史観の公 (定) 式は数学などの公 (定) 式とは違うものだということ「……もしそうでないなら、理論を任意の歴史時代に適用するのは、簡単な一次方程式 (Gleichung ersten Grades) をとくよりも、まだ容易なことであろう¹⁶⁾」と戒めている。

ところで、この公 (定) 式について櫛田氏は、マルクスの『経済学批判』の序言における「唯物史観の定式」を以下のごとく4つの段階に分節しているので、一応述べておくことにしたい。櫛田氏の解説 (ただし定式の邦訳は『マル・エン2巻選集』(大月書店) にしたがう) によると——「人間は、その社会的生産 (die gesellschaftliche Produktion) において、一定の、必然的な彼らの意志から独立した関係、生産関係 (Produktionsverhältnisse) にはいる。この生産関係は、彼らの物質的生産力 (materielle Produktivkräfte) の一定の発展段階に対応する。これらの生産関係の総体は、社会の経済的構造を形づくる。これが現実の土台であり、そして、そのうえに、法律のおよび政治的な上部構造がたち、そしてそれに一定の社会的意識形態が照応する。物質的生活の生産様式 (die Produktionsweise) が、社会のおよび精神的な生活過程一般を条件づける。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する¹⁷⁾」(公式第1段——櫛田氏)。続いて、第2段として「社会の物質的生産力 (die materiellen Produktivkräfte der Gesellschaft) は、その発展のある段階で、その生産力が従来その内部ではたらいてきた現存の生産関

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

係（Produktionsverhältnisse）と、あるいは、おなじことの法律的表現にすぎないが、所有関係（Eigentumverhältnisse）と矛盾するようになる。これらの関係は生産力（Produktivkräfte）の発展のための形態から、その桎梏にかわる。経済的基礎の変化とともに、巨大な全上部構造（der ganze ungeheure Überbau）が、おそかれ、はやかれ急速に変革される¹⁸⁾」（公式第2段——櫛田氏）。さらに第3段として「このような変革の考察にあたっては、自然科学の正確さで確認できる経済的¹⁹⁾生産諸条件（ökonomische Produktionsbedingungen）における物質的変革と、人間がこの衝突を意識し、かつ、これをたたかいぬくところの法律的、政治的、宗教的、芸術的あるいは哲学的な、つまりイデオロギー的な諸形態とを、つねに区別しなければならない。ある個人の人物を、その個人が自分をどう考えているかにしたがって判断できないのとおなじように、この変革時代を、その時代の意識から判断することはできないのであって、むしろ、この意識を物質的²⁰⁾生活（das materielle Leben）の諸矛盾から、社会的生産力（gesellschaftliche Produktivkräfte）と生産関係（Produktionsverhältnisse）とのあいだに現存する矛盾から説明しなければならない」（公式第3段——櫛田氏）。さらに続いて第4段として、「一つの社会構成体（eine Gesellschaftsformation）は、それがいれうるだけのすべての生産力（Produktivkräfte）が発展しきるまでは、けっして没落するものではなく、また、あたらしい、より高度の生産関係（Produktionsverhältnisse）は、その物質的な実存諸条件（die materielle Existenzbedingungen）が、旧社会自体の胎内で孵化しておわるまでは、けっして従来のものにとってかわることはない。だから、人間はつねに自分が解決しうる課題だけを提起する。なぜなら、いっそうくわしく考察するならば、問題そのものは、その解決の物質的条件がすでに現存しているか、あるいは、すくなくとも成立しつつあるかの場合にだけ、はじめて発生することが、つねにわかるであろうから」（公式第4段——櫛田氏）——と以上みられるように——

4段階に分節する。その結果、この定式においては「(1)一般文化の物質的基礎 (2)社会組織の弁証法的発展 (3)階級闘争の経済的基礎 (4)一般政策の前提——の4つの要素から成立²¹⁾」していることがわかるし、「人類社会の歴史とは、物質的な生活財の生産から出発して、その発展において、究極的には、生産諸力と生産諸関係とのあいだの弁証法的相互関係で規定される単一で同時に、矛盾にみちた過程であると見る。自然の発展と同様に、社会生活の発展も厳密に決定されている。すなわち、客観的で人間の意志・意識とは独立の法則および必然性に支配されている。それだからマルクスは、社会史は一つの自然史的過程と述べた²²⁾」に違いない。だがしかし、——定式を読んで、すぐ気がつくことは——櫛田氏のいうとおり——「それは第1、ものの言いあらわしかたが面倒にできているばかりでなく、〈生産〉とか〈生産力〉とか〈生産方法〉〔=生産様式〕とか似たような、また違ったような文字が使っており、マルクスの術語を知らぬものには、甚しく難解²³⁾」である。確かにチョット読んだだけでも、「生産」という表現のなかに、いくつも違った表現——つまり社会的生産 (gesellschaftliche Produktion)、物質的生産力 (materielle Produktivkräfte)、生産関係 (Produktionsverhältnisse)、生産様式 (Produktionsweise)、社会の物質的生産力 (die materielle Produktivkräfte der Gesellschaft)、社会的生産力 (gesellschaftliche Produktivkräfte) というような「似たような、また違ったような」表現がみられ「マルクスの術語を知らぬものには、甚しく難解」としかいいようがない。定式だけを読むかぎり、とうてい理解できない。定式が「断片的な警句的な註釈」 (abgerissene aphorische Bemerkungen) であることを思い知らされる。しかも困ったことには、唯物史観の定式化にかんして「創設者自身の説明というものがなく、結論だけが投げ出された形である。その投げ出された形式が〔このように〕難渋で…要するに公(定)式は、それだけでは余り、わからぬもの²⁴⁾」で公(定)式だけ読むかぎり、十分に解らないように書かれている。河上肇博士すら

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

「私ははじめて、この公式に接してから、すでに15、6年の間、幾度か繰り返してこれを読みつつ、次第にその解釈を変えてきた²⁵⁾」と述べているくらい、定式には曖昧な点がある。というのは「マルクス＝エンゲルスは史的唯物論については、経済学の場合と異って、体系的な説明をのこさなかった。マルクス＝エンゲルスはむしろ史的唯物論を完全に彼らのものとして、それによって現実の研究において成果をあげることに全努力を傾けた。かくて、彼らが史的唯物論そのものについて書いたところは、むしろ断片的であり、この理論の核心を略述するというに近いものとどまった²⁶⁾」からで、彼らは、理論の核心を——その時に応じて——述べたにすぎない。のみならず「定式化するものが……理論的考察の結論の、しかも手短かなる表現にとどまり、重要なものは、むしろその理論的考察そのものにある²⁷⁾」のだし——しかも創設者の説明が与えられていないとすると——定式理解が困難であるばかりか曖昧な点がでてきてしまう。たとえば「生産力」という概念ひとつ取りだして考えてみても「唯物史観の根底となるのは生産力という概念」であることは周知のとおりである。（マルクス自身、「生産諸力は、人間の全歴史の基礎（die Basis ihrer ganzen Geschichte）である」とさえ明言している）。だから「かくて、われわれにおいては、社会の変化は生産諸力の変化という基礎をもつものであり、一貫したるものとして現われる。ここでは歴史は絶えざる発展として、まとまれる一体をなす²⁸⁾」ということが首肯されよう。ところが、マルクスはむしろのこと「またエンゲルスも、この生産力なる概念については、何ら正確な定義を与えていない²⁹⁾」し、そもそも〈生産力〉の概念が唯物史観においては常に強調されるにもかかわらず、決して明確に説明されたことはない。それが単なる〈労働の生産性〉や〈生産技術〉を指すのであれば簡単であるが、唯物史観においては、この言葉はそれほど簡単には使われてはおらず、また単にそれだけの意味であるならば決して歴史の要因としても、あのように大きな地位を与えられることはないであろう。〈生産関係〉

についても、また〈生産力〉と〈生産関係〉との関係についても、厳密に検討すれば同様にはなはだは³⁰⁾っきりしない点が生じてくる。そして、これらすべてに存在する曖昧さが、唯物史観による歴史叙述の上に一つの難点を構成していることは争われない事実³⁰⁾であるし、「常識的に我々が法則性をいう場合には、それはある法則の存在によって、おのずから事物が決定されることを意味する。唯物史観において、しばしば経済関係が歴史を決定すると説かれるのもそのような意味であろう。しかし唯物史観においては、この決定する bestimmen という言葉と共に、また、しばしば制約する bedingen という言葉が用いられる。『経済学批判』の序文の定式で使われているのは、この言葉である。マルクス主義においては、この両者は特別に区別されていないようである。しかしこの2つの言葉の意味は必ずしも同じでない。bedingen は〈条件づける〉ことであって必ずしも〈決定する〉ことではない。もちろん〈条件〉とは、あることが起るための条件であるから、その条件が満たされれば、その事柄が生起すると考えるのは一応の常識である。しかし実は条件が与えられたからといって、必ずしもその事柄が起るとは限らない。それは可能性を与えることであって、その実現を保証することではない。その意味で〈制約する〉ということとは、決して〈決定する〉ということではないのである。マルクス・エンゲルスは〈制約する〉という言葉で〈決定する〉と同様に用いているから、もちろん、このような限定された意味でこの言葉を用いてはいない³¹⁾のである。このように、「生産力」という概念ひとつにしても、明確な説明がないまま——「さればこそマルクスは一つの社会階級をも、生産力と呼ぶことができた³²⁾」くらい曖昧な概念なのである。定式そのものにしても、曖昧な点が少なからず感ぜられ——たとえば経済的土台（下部構造）が上部構造に照応するといっても——「生産力によって生産関係が定められる過程、生産関係によって政治法律の定められる過程、生産関係によって諸種の観念形態が定められる過程は、それぞれにちがうと考えられる³³⁾」

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

ことは誰しも考える点であろうが、それらは、まったく説明されていない。のみならず、マルクスの唯物史観にかんする諸定式は「マルクスとともに、この史観の創始者ともいわれているエンゲルスの表〔定〕式がマルクスのそれと形成上違っているということによって刺戟される」³⁴⁾ことになる。エンゲルスは確かに「生の生産および再生産」という言葉を使っているが、そのエンゲルス自身の表現にしても「エンゲルスが1890年、唯物史観にかんして、一学生の質問に答えた書簡として、*Sozialistische Akademiker*, 1. Jahrg. Nr.19. に収められたものは“Produktion und Reproduktion des *wirklichen* Lebens”（実生活の生産および再生産）とあり、さかのぼって『家族・私有財産および国家の起源』（1884）の序文では“Produktion und Reproduktion des *unmittelbaren* Lebens”（直接的生の生産および再生産）と述べている」³⁵⁾し、1883年3月17日の『カール・マルクス葬送の辞』では“die Produktion der *unmittelbaren materiellen* Lebensmittel（直接的・物質的・生活手段の生産）という言葉を使っているから——エンゲルスは、その時どきによって表現を変えたもののようと思われる。（しかも十分な説明もなしに）。だからツガン・バラノフスキー（Tugan Baranovsky）は「最近、歴史哲学の方面において、この学説ほど多くの批判文献を喚（よ）び起したものはなく、また、この学説ほど大なる誤解の誘因となったものもない。そこで、この学説を批判し、または論究しようとする者は、まずそれに対する彼ら自身の解釈を提供することが必要になってくる。けだし唯物史観の創始者たちは彼らの観念の確立については極めて無屯着であり、したがって、この学説に対する彼ら自身の説明は至って貧弱であった。そこで批判者みずからまず、この観念を確立し、もって彼れ自身の批判に対する堅き根底をえてかからなければならない」³⁶⁾と述べ「それは何よりもまず、この学説の創始者たち——少しもその観念の定式化に苦心しなかったところの——側における学説表現の形式上の欠点にもとづく」ものであると断定している。つまりマルクスにしろ、

エンゲルスにしろ、「彼ら自身の説明は、いたって貧弱」で、「彼らの觀念の確立については無屯着」で、彼らの觀念の定式化に少しも「苦心しなかった」から、こんな学説表現の曖昧さが生じたのであらうと説明している。——とすれば、小論では、「生の生産および再生産」という言葉の語義を考えてみる必要がある。

- 注 1) F. Engels. Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft. M. E. A. S. S.126. 邦訳「空想から科学への社会主義の発展」『マル・エン 2 卷選集』（2 卷）102 頁。○印引用者。
- 2) F. Engels. Rede am Grabe von Karl Marx. M. E. A. S. S.157. 同選集，127 頁，○印引用者。
- 3) 大森義太郎『史的唯物論』前掲書 5 頁。
- 4) 同書 159 頁，○印引用者。
- 5) 同書 160 頁，○印引用者。
- 6) 同書 161 頁，傍点原著者，○印引用者。
- 7) 櫛田民藏『唯物史観』昭和 22 年，改造社，41 頁，○印引用者。
- 8) 同書，55 頁。
- 9) ベネデット・クロオチエ「史的唯物論とマルクス派経済学」（『社会思想全集』西宮藤朝訳，昭和 4 年，平凡社，101 ～ 2 頁，所収）○印引用者。
- 10) Karl Kautsky. Ethik und materialistische Geschichtsauffassung, Verlag. J. H. W. Dietz Nachf. GmbH. 1922. S.117. 由利英一邦訳『倫理と唯物史観』昭和 3 年，共生閣，169 頁。
- 11) 大森義太郎，前掲書，193 頁。
- 12) 同書，179 頁。
- 13) 同書 212 頁。
- 14) 同書，213 頁，○印引用者。
- 15) Engels an Schmidt, London. 5. August. 1890. M. E. A. S. S.457. 『マルエン 2 卷選集』（第 2 卷）381 頁。
- 16) Engels an Bloch, M. E. A. S. S.459. 同上，382 頁，○印引用者。
- 17) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie (Vorwort), M. E. A. S. SS.337～8. 同上（第 1 卷）267 ～ 8 頁，○印引用者。
- 18) ibid., S.338. 同上，268 頁，○印引用者。
- 19) ibid., S.338. 同上，268 頁，○印引用者。
- 20) ibid., S.338. 同上，268 頁，○印引用者。
- 21) 櫛田民藏，前掲書，34 ～ 35 頁。

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

- 22) レートロー他編著『弁証法的・史的唯物論』秋間実訳，1980年，大月書店，345頁。傍点原著者。
- 23) 櫛田民藏，前掲書，56頁，○印引用者。
- 24) 同書，59頁，○印引用者。
- 25) 河上肇，前掲書，15頁，○印引用者。
- 26) 大森義太郎，前掲書，193頁，○印引用者。
- 27) 同書，212頁。
- 28) 同書，177頁。
- 29) ツガン・バラノヴィスキイ，前掲書4頁，○印引用者。
- 30) 林健太郎『史学概論』昭和50年，有斐閣，113頁，○印引用者。
- 31) 同書，142～3頁，傍点原著者，○印引用者。
- 32) ツカン・バラノヴスキイ，前掲書，4頁，○印引用者。
- 33) 高田保馬『マルクス批判』昭和25年，弘文堂，106頁。
- 34) 櫛田民藏，前掲書，58頁。
- 35) 同書，59頁。
- 36) ツガン・バラノヴスキー，前掲書3頁，○印引用者。

B. 「生の生産および再生産」の語義

唯物史観の創始者たちが「十分な説明」なしに，しかも「彼らの観念の定式化には，少しも苦心せずに，しかも無屯着に」表現したものであることは，多くの研究者たちの証言にしたがって前節で述べたとおりである。だからジョン・スパルゴ（John Spargo）などは「唯物史観にかんし，明瞭，精緻，かつ完全なる記述をマルクスやエンゲルスの著作に求めんとするがごときは，労して効なきことである。この学説は極めて重要なものであるに拘らず……この学説の創始者は，これを精練して，もって一つの体系を与えうるまでに至らず，むしろやや急造的な概括的記述をもって足れりとし，時折これに，ふえん（原文漢字）や変改を施したものであって，殊にマルクスの死後，エンゲルスによって，このふえんや変改がしばしばおこなわれているのである¹⁾」と慨嘆しているが——「語義」をさかのぼって究明するということは，果して「マルクス死後，エンゲルスが布衍や変改」をあえてしたものかどうかを，いまいちど検討する必要性が生まれた

ことを意味する。いいかえると「生の生産および再生産」という表現のなかに、果して「種族の繁殖」(＝人口増加)という内容が、当初(唯物史観の成立時)から含まれていたのか、いなかったのか。晩年のエンゲルスが、歴史の決定的要因として、生活資料の生産のほかに、人口増殖を加えることによって、〈唯物史観の生々しき魅力の主因をなしていた、その極端な単純性(一元性)〉を本当に変改し、布衍(拡張解釈)したものなのか、どうか。人口増加(種の繁殖)というものが歴史の究極の決定的要因たりうるものかどうか、それとも種の繁殖(＝人口増加)というものは、もともと、歴史の決定的要因として決定する(bestimmen)以前から、ほんらい歴史の進展に伴うべきものとして、前掲(bedingen)されていたものかどうか、が問題になってくる。つまりプレハーノフのいうように「このばあい、すべての問題は付加すべき〈補足〉のために、エンゲルスの見解が変化したかどうかというところにある。すなわち彼〔エンゲルス〕が本当に〈生産〉の発達のほか、それと同等なる他の動因〔決定的要因〕の作用をも承認することを余儀なくさせられたかどうかという点²⁾」を検討する必要がある。エンゲルスが『家族・私有財産および国家の起源』(1884)の序文で述べた、新らしい定式化のばあいには、歴史の決定的要因として、「種族の繁殖」(＝人口増加)を——物的な生活資料の生産とは別に——加えていることは明白であるから——とすると、これは唯物史観の一元性、「生々しき魅力の主因をなしていたその極端な単純性」を乱したという批判が当然生まれてきてしまう。古在由重氏は「エンゲルスの誤った規定³⁾」と述べているが、〈誤った規定〉と即断する前に、「語義」の由来にさかのぼって検討してみる必要がでてくる。この点について、南亮三郎先生の近著『人口論 50 年の後』はすこぶる示唆に富むものであった。南先生によると「わたし自身は長い間、マルクスとエンゲルスの史観にたいして一つの疑問を抱いてきた。……それは結局、この学説の出発点に出てくる「直接的な生の生産および再生産」(die Produktion

唯物史観における生の生産および再生産について（上）
und Reproduktion des unmittelbaren Lebens) という語義に関するものであった……「唯物論的見解によれば、歴史における究極の決定的要素は直接的な生（レーベン）の生産および再生産である。これは、しかし、それ自身また2種に分れる。1は生活資料すなわち食・衣・住の諸対象ならびに、それに必要な諸道具の生産、他は人間それ自身の生産、すなわち種族の繁殖である……」——これは彼らの学説のほんの入り口を掲げたものに過ぎないが、そこには明白に、物的な生活手段とは別の、人間種族の繁殖が語られている。これは一体「一元論」としての史観のすがたを著るしく、こわすものではなかろうか、エンゲルスはマルクスの没してのち、単独に、このように、いわば多元的な史観、あるいは、その拡張解釈を述べたのであろうか、というのがわたしのまず抱いた疑問であった⁴⁾と述べられ、さらに〈唯物史観誕生の書〉なる『ドイツ・イデオロギー』にさかのぼって「生の生産の2重的性格」の検討をころもておられる。すると彼ら両人の若き日の著作『ドイツ・イデオロギー』においても、「本文中には「生の生産、すなわち労働においては自分自身の、生殖においては他人の、生の生産は……」といった、かのエンゲルス〔40年後のエンゲルス〕とそっくり同じ文言が出てくる⁵⁾」のを確認されておられる。すなわち「……そのために、わたしは、彼ら両人の関係文献を検索した。どこにも彼らは「他人の生の生産」——種族の繁殖とか、人口とかを説いていない。ここにおいて、エンゲルスのあの拡張解釈は、ちょうどその直前に出たアメリカのモルガン（Lewis. H. Morgan 1818~1881）の《古代社会》に誘発されてエンゲルスが若い頃からの考えを思い出して書き流したのだというクノー（Heinrich. W. Cunow）説やカウツキー（Karl. J. Kautsky）説がとび出したりした。幸いなことに、ちょうどわたしの検索中に、マルクス、エンゲルスの青春時の未刊の共同労作《ドイツ・イデオロギー》がロシアのリャザノフ（Rjazanov）、続いてアドラツキー（Adoratskij）らの苦心編集ののちに初めて出版せられた。わたしは上述の疑

点をはらそうとして、それを検討した。するとその痕跡はたしかにあった。しかし彼ら兩人の青春時の共同労作は、マルクスの口述をエンゲルスが筆記したものらしく、おまけに種族の繁殖とか人口とかいう文言はエンゲルスのあとからの書き込みになっているとかで、果してマルクス自身がどう考えていたか不明というほかはなかった⁶⁾と述べておられる。現行版の『ドイツ・イデオロギー』（『マル・エン全集』第3巻所収、ただし、現行版の『ドイツ・イデオロギー』は近年の研究によると、「事実上偽書に等しい」ことが報告されている。この点は次号で詳しく述べる——筆者）によると「……さて労働における自己の生の生産にしても、生殖における他人の生の生産にしても（sowohl des eignen in der Arbeit wie des fremden in der Zeugung）、およそ生の生産なるものは、とりもなおさず或る2重の関係として（als ein doppeltes Verhältnis）——一面では自然的関係として、他面では社会的関係として——現われる⁷⁾」ことが明記されている。とすると、晩年のエンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』の序文にみられる「新らしい定式化」が「〈補足〉のためにエンゲルスの見解が変化したかどうか」⁸⁾どころではないということがわかる。エンゲルスが「マルクス死後、勝手に布衎やら改変をしたのだ」などと軽々に即断したことが誤りであったことが明らかになってくる。何となれば、エンゲルスはすでに40年も前に、そっくり同じことを述べているのだから……。

南先生の往年の名著『人口理論と人口問題』から、この辺の叙述を読んでもみると「問題を解くべき鍵の一つは、ここに与えられた」と判断され、「生の生産は物質的生活資料の生産（＝労働）という意味だけではなく、それと並んで、他人の生命の生産（＝生殖）という意味をも含んでいる⁹⁾」のだから、この鍵を使って「生の生産および再生産」のほんらいの語義の扉を開こうと『ドイツ・イデオロギー』を抱えて「盛夏の日々を苦悩」のうちに熟考を続けられたようである。そして、もう一度『ドイツ・イデオ

ロギー』を読み返してみたといわれる。つまり「私は3度『ドイッチェ・イデオロギー』の本文を読みかえしてみる。すると、この書の著者たちが3つの歴史的行為を説明するに先立って〈……あらゆる人間存在の、それゆえにまたあらゆる歴史の第1前提（die erste Voraussetzung）を——すなわち、人間は『歴史を作り』えんがためには生きえなければならぬ、という前提（Voraussetzung）を——確認することから始めなければならない〉というておる冒頭の一句が、私の眼に特別の注意をひくものとして現われる。彼らはここで、互に独立の存在を主張するというが如き意味における歴史の異なる起動力を列挙しているのではない。彼らの説かんとするのは〈あらゆる人間存在の、あらゆる歴史の第1前提〉であり、〈あらゆる歴史の基本条件〉である。ありのままの経験的事実を、ありのままに認めんとする歴史科学的認識の、そもそもの発足点がここに記（しる）¹⁰⁾されてある」のだ、といわれる。つまり、ここでは〈あらゆる人間存在の、あらゆる歴史の第1の前提〉が述べられているのであり、種の増殖（＝人口増殖）は人間歴史の前提条件のなかに既定の事実として組み込まれているのであって、人間歴史の起動力を述べているのではない、ということを描いておられる。——だから「すでに歴史の〈前提〉であり〈条件〉であるとせられるものは、それ自身歴史の起動力と目せられるべきではない」¹¹⁾ことは当然であって、すでに〈歴史〉の「条件」とか「前提」となっている人口増殖（種の繁殖）が同時に歴史の決定的要因（起動因）となるわけがない。つまり「生殖に対する熱望は人間本性に頑固（がんこ）に存するものである。われわれは、これ（生殖本能）をすでに人類史前にみる。それは、すでに、社会経済よりも前に存在していたところの自然的・動物的・生物学的な過程」¹²⁾なのであって、種の繁殖（＝人口増加）は歴史の前提条件であっても、歴史の究極の決定的要因とはなりえない。確かに「一定の人口密度がなければ社会生活は不可能であり、とくに、社会的生産過程は不可能である。〔したがって〕かんじんなのは、人

口が社会の物質的生活の基礎的な根本条件だという点¹³⁾にある。だから南先生は「マルクスの史観の内部において、人間の生殖や人口増加に、生活資料の生産ないし労働と並び¹⁴⁾ての地位を与えるものと解するのは、決して至当ではなかろう¹⁴⁾」といわれ、——結局のところ——エンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』の序文の「新しい定式化」の意味について「当時のわたしの到達した結論の要点は「生の生産および再生産」として、マルクス、エンゲルスたちが考えた物的生産が「一方では労働の、他方では生殖の」といった2つの側面にまたがっていたとしても、それは同じ社会、同じ歴史に、対等の要素としてあるのではなく、人間の生殖が主役を演ずるのは、労働生産力のいまだ十分に発達しないところの、したがって一般には唯物史観学説の構成範囲外にぞくするとせられる原始社会¹⁵⁾だけだ、ということであった¹⁵⁾」と結論された。つまり「階級の¹⁶⁾ない原始社会¹⁶⁾では、直接的生命の生産および再生産が歴史発展の基礎¹⁶⁾」であることをエンゲルスは説いているにすぎないのである。

ただひとつ、近年の研究者らの報告によると——現行版『ドイツ・イデオロギー』は事実上、偽書（にせもの）に等しいという。その理由はリヤザノフとアドラツキー版の編集者、P・ウエラー氏が第1巻、第1章の素材をもとに「換骨奪胎的な再構成に腐心し¹⁷⁾」し「極端なつぎはぎ細工¹⁸⁾」をしていたことが判明したこと、次に「ありていに言えば、マルクスの方がいかに甚しく立後れていたか、また唯物史観は主として、専らエンゲルスの創見によるものであって、マルクスはむしろエンゲルスに学んだのだ¹⁹⁾ということ¹⁹⁾」などが明らかになるにつれて、これまでの見解（わかり易くいうと『ドイツ・イデオロギー』そのものについても）を大きく修正しなければならなくなってしまった。そこで、また、新らしい問題が生まれてくる。現行版『ドイツ・イデオロギー』が偽書（にせもの）ならば、ベ・カ・ブルシリンスキーの監修であらたに編集された新版『ドイツ・イデオロギー』においては「生の生産および再生産」にかんしても、エンゲルス

唯物史観における生の生産および再生産について（上）

は、いかに叙述しているのであろうかということである。以下次号で述べよう。

- 注 1) スパルゴ「社会主義と宗教」（『社会思想全集』第37巻，島中雄三邦訳，昭和3年，平凡社，38頁所収）。印引用者。
- 2) プレハノフ「史的一元論」（同，第17巻，川内唯彦邦訳，188頁所収）傍点原著者。
- 3) 古在由重『マルクス主義哲学の発展』青木文庫，1952年，163頁。
- 4) 南亮三郎『人口論50年の後』昭和55年，千倉書房，62～63頁，。印引用者。
- 5) 同書63頁，傍点原著者，。印引用者。
- 6) 同書63頁。
- 7) M. E. W. Bd. S.29.『全集』第3巻，25頁，。印引用者。
- 8) プレハノフ，前掲書，188頁，傍点原著者。
- 9) 南亮三郎『人口理論と人口問題』前掲書，72頁，。印引用者。
- 10) 同書，83頁，傍点原著者，。印引用者。
- 11) 同書83頁，。印引用者。
- 12) N. Bukharin, Historical Materialism, Russell & Russell. INC, New York, 1965, p. 123. 邦訳215頁，。印引用者。
- 13) レートロー他編著『弁証法的・史的唯物論』前掲，359頁。
- 14) 南亮三郎『人口理論と人口問題』前掲，84頁，傍点原著者。
- 15) 南亮三郎『人口論50年の後』前掲，64頁。
- 16) エルスナー『現代マルクス主義とその批判者』，国民文庫，1968年，223頁，。印引用者。
- 17) 広松渉『マルクス主義の成立過程』至誠堂，昭和49年，150頁。
- 18) 同書，161頁。
- 19) 同書97～98頁，。印引用者。